The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「つどいの場」参加者のエンパワメントと支える住民のネットワークづくり
Author(s)	有馬, 和代; 藤田, 真実; 臼井, 香苗 他
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/52399
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

10. 『つどいの場』参加者のエンパワメントと支える住民のネットワークづくり

主任研究者　有馬　和代（大阪市大正保健所）
分担研究者　藤田真実　（大阪大学医学部保健学科）
臼井香苗　（　　同　上　　）
三上　洋　（　　同　上　　）
志村雅彦　（大阪市大正保健所）
林　佑幸　（　　同　上　　）
前野多喜子（　　同　上　　）
桑島義昭　（中泉尾地域ネットワーク委員会代表）
藤原淳子　（　　同　上　　）
スーパーバイザー　伊藤美樹子（大阪大学医学部保健学科講師）

【要約】

行政主導で作りあげられてきた地域ネットワーク委員会は、身体が不自由である等の理由のため地域での活動や行事に参加していない高齢者（以下閉じこもりがちな高齢者とする）や障害者のために、集える場（以下『つどいの場』とする）を作り上げてきた。しかし、『つどいの場』を住民が主体的に継続実施していくためには、集い参加者自身の主体性が不可欠であり、そのためには集い参加者自身が『つどいの場』の必要性を再認識し、自分達が安心して生活していくための活動であると気づくことが必要となる。そこで、集い参加者が主体的に活動し、またそれが地域の人々の関係をつなぎ地域づくりの一つのとりかかりとなることを目指して、住民参加による質問紙調査の実施とその結果報告会を開催した。そしてその成果を踏まえて、これからの『つどいの場』の活動について考える会合を様々な地域組織において実施した。その結果、次のような変化が見られた。①集い参加高齢者は『つどいの場』に参加することの効果や必要性に気づき、主体的に活動するようになった、②NW委員は『つどいの場』の必要性を再認識し、それがまた自分達のための活動でもあることに気づいた、③地域住民は『つどいの場』やそれを必要とする人々の存在と地域活動に参加する手段を知り、新たに『つどいの場』に参加する住民や潜在していたボランティアが増加した、④PTAや子供会、老人会は『つどいの場』との協働活動に意欲を見せ、実際に計画（一部は既に実施）している。これによって、様々な地域住民が交流できる兆しが見え、『つどいの場』が地域とのつながりをもって活動を広げ始めるようになった。

キーワード：参加型行動研究・エンパワメント・つどいの場・住民主体

Ⅰ．研究に至るまでの経過

1．『つどいの場』が出来るまでの中泉尾地域の状況

大正区中泉尾地域は、大正区のほぼ中央に位置し昔ながらの長屋が多い地域である。人口5,864 人で、65歳以上人口が821 人、高齢者率は14.0％である。これは、大正区全体の13.1％に比べて0.9 ％高く、大阪市の14.1％とほぼ同じ値を示す（平成7年国勢調査）。大正区における65歳以上高齢者の家族との同居率は53.4％である。

高齢者を地域で支えていくための『大阪市みおつくしプラン[1)]』に則り、平成3年11月に地域ネットワーク委員会（以下NW委員会とする）が発足した[(註1, 2)]。平成5年1月から活動体制が整えられ、実際に活動を開始したが、中泉尾地域においては、高齢者の家族は高齢者を身内だけで看ていこうとし、地域住民は、家族のいる高齢者に対して積極的に関わらなかったため、NW委員会自身は自分たちの活動ニーズはないと認識して、ほとんど活動をしていない状態であった。

その当時、高齢者が地域で参加できる活動や行事は、いずれも活動場所まで一人で外出できる人が対象である①老人クラブ、②婦人団体協議会実施の会食形式の食事サービス、③地域社会福祉協議会主催の敬老会、④老人福祉センターの利用があり、中泉尾地域の高齢者は比較的よく参加していた。しかし、一人

で外出できなくなると「他人や家族に迷惑をかけたくないから」と言って自然に参加しなくなったり、自宅への配食サービスに変わったりした。一方では、地域での活動に参加できなくなった高齢者から「昔のようにみんなと話がしたい、食事を楽しく食べたい」という声が聞かれ、食事サービスに参加している高齢者からも「ここにこれなくなると、本当に寂しくなる。歩けなくなることが怖い」という声が聞かれた。この状況において保健婦は、閉じこもりがちな高齢者と外に出ても、昔なつかしい話ができる人や場がないため、ただ散歩だけに終わり、高齢者一人一人の社会性を高めていくことに限界を感じていた。

2. 住民が『つどいの場』の必要性に気づくまでの保健婦による条件づくり

保健婦は関係機関と連携を取りながら、閉じこもりがちな高齢者やその家族、それ以外の地域住民が、そうした高齢者や障害者が出ていける場の必要性に気づくための「動機づけ」や「条件づくり」を行ってきた。

閉じこもりがちな高齢者や障害者とその家族に対しては、高齢者が身体面に自信がもてるように、①ADLを高める関わり（ベッドサイドでのリハビリ）、②本人の外出意欲を高める関わり（高齢者どうしの茶話会）を行った。これらの関わりによって、高齢者自身は身体を動かすようになり、家族にとっては介護負担の軽減につながった。そして、高齢者や家族は「外出すること」や「友人達と話したり、ふれあうこと」が大切であることに気づき、閉じこもりがちな高齢者が出ていける場の必要性を感じ始めた。

地域住民に対しては、閉じこもりがちな高齢者や障害者が出ていける場があれば、自分達にとっても安心して生活できる地域づくりにつながるという気づきを促すために、コミュニティーミーティングを開催し、平成8年から「自分」を振り返る語り合いや、人生への「思い・夢」を語る学習を１年間行ってきた。これらの関わりによって、友人とふれあえた時・自分が役立っていると感じられた時に自分が活き活きすると気づいたり、もし身体が不自由になっても外に出て友人と話がしたいという思いや、自分らしく生きたいという思いを語り合うことができた。しかし、次に何をすればいいのかについて具体的な考えは住民からは出なかったため、保健婦と一部のNW委員が「閉じこもりがちな高齢者が集える場を作ろう」と提案し、これがきっかけとなって、NW委員会による『つどいの場』活動は始まった。

3. 『つどいの場』の活動の実際

『つどいの場』の活動は、平成9年5月の月1回カラオケから始まった。活動が軌道に乗ってからは、閉じこもりがちな高齢者や健康な高齢者、NW委員が『つどいの場』の目的・目標を共有し、やりたいことや得意なことを話し合い、活動内容や役割をみんなで決めながら実施してきた（表1.）。

表1.　『つどいの場』の活動概要

活動内容： 室内 室外	歌体操、遊びリテーション、手芸、折り紙、料理、カラオケ クリスマス会、家族会の交流会 買い物大会、喫茶店での集い お花見、大阪ドーム見学会
活動日時：	月２回　第１木曜・第３水曜 午後1：00〜3：30
参加者：	閉じこもりがちな高齢者13名 （B群５名、A群３名、Ｊ群２名、痴呆３名） ・健康な高齢者３名 ・ＮW委員５名・地域担当保健婦１名
運営費：	ＮW委員会の活動費のみ （参加費は無料）

4. 『つどいの場』の活動の問題点

しかしながら、保健婦は、『つどいの場』の活動を共に実施していくなかで、下記のことを問題点と感じるようになってきた。

(1)集い参加高齢者は、自分の意見を言わずに、存在感がない時があり、また「腰が痛いし、参加してもみんなに迷惑かけるから」との理由から参加に消極的になる人がみられる。

(2) 家族は、高齢者の集い参加に対して積極的に後押しする家族が少なく、『つどいの場』の活動を知らない家族もいる。

(3)ＮW委員は、『つどいの場』でのお茶くみ、会場の準備には中心的に関わっても、高齢者の送迎に関わ

ろうとしない委員が多く、高齢者の輪の中に入ろうとしない委員がいる。場の誘導や、車椅子からトイレへの移動の援助においては保健婦に依存的である。

(4)地域住民は、『つどいの場』を知らないためか、ボランティア希望者や新たな参加者がいない。

II．研究目的

閉じこもりがちな高齢者の社会性を高め、維持するうえで、活動の活性化が不可欠であると考られるが、『つどいの場』の現状において保健婦は、参加者である高齢者やNW委員の主体性が欠けている状態にあると感じていた。こうした状態は、エンパワメント理論において、自らの生活を決定する能力や他者との共同により何らかの目的を達成できない、つまりパワー（power）が欠如している状況（パワーレス、powerless）であると言える。清水[2)]は、文献レビューによって、エンパワメントは一般的にはパワーレスな人たちが自分たちの生活への統御感を獲得し、自分たちが生活する範囲内での組織的、社会的構造に影響を与える過程と定義され、その過程には「参加」―「対話」―「問題意識と仲間意識の高揚」―「行動」というプロセスが見られると述べている。

そこで、本研究では、住民との参加型行動研究によって、集い参加者が『つどいの場』の必要性を再認識し主体的に行動できるようになるという集い参加者のエンパワーメントを達成するために以下のことを行った。

①「自分達の地域の現状を知る」ための住民参加型調査の実施とその結果報告会の開催、②①の成果を踏まえて、これからの『つどいの場』の活動について考える会合を様々な地域組織において実施した。

本研究におけるエンパワメント活動の成果は、エップ報告書[3)]を参考にして、①高齢者が地域住民に家族的な環境で支えられながらセルフケア力を高められているかどうか、②高齢者・家族・地域住民がお互いに支え合う行動や関係が見られるかどうか、③地域の人々が有機的に連携できているかどうかといった視点から評価することとした。

III．研究方法

今回の研究の全過程を図1.に示す。

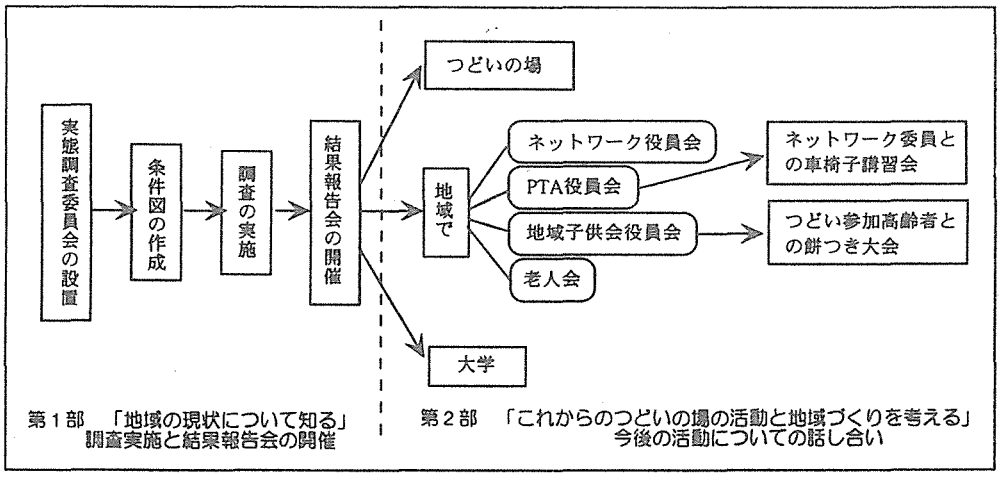


図１：研究の経過

1．実施方法

(1)調査委員会の設置

保健婦の呼びかけに応じた集い参加高齢者とNW委員で構成し、調査票の作成から調査の実施、分析、報告まで住民と共に実施していくための調査委員会を設置した。

(2)調査項目の検討と調査票の作成

保健婦は岩永らの方法[4]を参考に、調査委員会に対して「この場に参加するためにはどんな条件が必要なのか」、「自分がこの場に参加できるのはどんな条件が整っているからなのか」と投げかけながら、『つどいの場』に参加できる条件図（図2.）を作成した。これらを基にして、研究者の協力を得て自記式調査票を作成した。調査項目は、性、年齢、健康状態、ADL、外出状況、外出頻度、地域活動への参加状況、楽しみ、住居環境等であり、これとは別に、調査実施時に『つどいの場』とNW委員会活動をPRするためのリーフレットを作成した。

(3)質問紙調査の実施

平成10年6月25日～7月31日に大正区中泉尾地区の成人住民228名を対象に自記式質問紙調査（記入困難者は代筆にて）を実施した。対象者の内訳は、集い参加高齢者17名、集いに参加していない寝たきり者14名、集い参加高齢者の家族9名、集いに参加していない寝たきり者の家族11名、NW委員44名、老人クラブの会員51名、老人給食参加者30名、ならびにNW委員の機縁による一般住民52名である。調査票の配布と回収は、NW委員44人、訪問看護婦4人、保健婦1人が実施し、この時『つどいの場』やNW委員会のPRを行った。回収率は100％であった。また、調査結果の分析は研究者の協力を得て行った。

(4)結果報告会の開催

結果報告会の周知は、NW委員・集い参加高齢者が中心になり口コミや回覧文を回して行い、会場設営などの準備はNW委員が行った。報告会はNW委員会が主催し、保健婦・研究者が進行を担当した。報告会では、結果説明会とグループワーク2回の三部構成で行った。グループワークを円滑に進めていくため、参加予定者が40人前後と考えて1グループ10人までとし、3～4グループを予定した。グループワークリーダーは、研究者と保健婦が行い、出された意見はリーダーが模造紙に記載し、提示して報告した。最初にグループワークを行い、「自分達の生活に関する理想像」を話し合った後、調査結果説明会において、グループワークの理想像と現実（調査結果）を整理した。それを受けて、このギャップを埋めるために「自分は何ができるか」について2回目のグループワークを実施し、最後に、出された意見から今後の活動方針を出して報告会を終了した。

Ⅳ．研究結果

第一部 「自分達の地域の現状について知る」－住民参加による調査の実施と結果報告会の開催を通して－

1．住民参加による調査の実施

方　法	結　果（集い参加高齢者・NW委員・地域住民の状況・反応）	保健婦の気づき・意味づけ
①調査委員会設立の呼びかけと設置	【集い参加高齢者、NW委員が】 ・調査に対する経験がないため、自分達に何ができるのかという戸惑いがあったが、集い参加高齢者13名、NW委員4名が呼びかけに応じた。	住民は、自分達のための調査とは感じられていなかった。
②条件図の作成と調査項目の検討 ・条件図の作成（図2.）	【集い参加高齢者、NW委員が】 ・条件図の作成時に、「自分がこの場に参加できるのは、家族が車イスを押して連れ出してしてくれるから」、「自分で出たいと家族に言うから」や「独り暮らしの人は誰かが出してあげなくては」といった意見が活発に出され、『つどいの場』に参加するための本人の条件や周囲の人の条件、今後整える必要のある条件等が挙げられた。 ・さらに、NW委員からは「こんな条件が整っている家庭は少ないのでは。どれだけの車椅子利用者が出られているかな」といった疑問や興味が出されるようになり、自分達の活動を検証してみたいと感じる人がいた。	・自分の生活態度や家庭環境の振り返りを通して、『つどいの場』に参加できる条件を考えられていた。 ・調査実施者としての課題を主体的に考えられるようになった
・最終調査項目の検討	【NW委員が】 ・研究者らによって作成された質問紙を試験的に実施して、高齢者や住民が答えやすい項目であるかの確認や修正を自分達で行った。	・意識が明確化してきた。

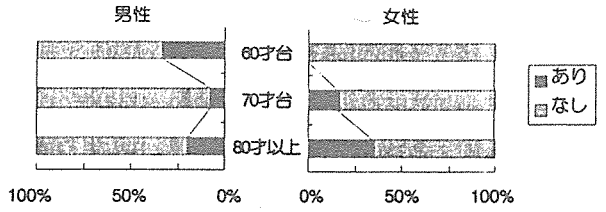
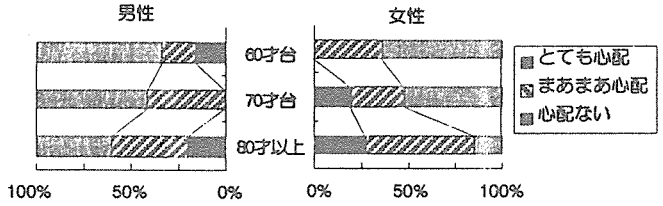
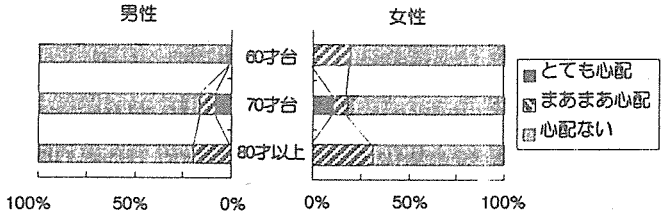
方　法	結　果（集い参加高齢者・NW委員・地域住民の状況・反応）	保健婦の気づき・意味づけ
③実態調査の実施において ・調査に答える	【調査対象者は】 ・「自分が元気になる時は、みんなと集っている時である」、「出ていける場ができて自分が明るくなった」、「この場は自分達にとって必要な場である」と認識できる人もいた。 ・調査で『つどいの場』を知り、参加したいという寝たきり者や、家族が勧奨したケースがいた（1名）。 ・『つどいの場』のリーフレットで家族が改めて、場の活動やNW委員会の存在を知ったという声や、NW委員会に対して感謝する家族がいた。 ・調査で『つどいの場』を知り、参加したいという健康な高齢者がいた（3名）。 ・「自分は車椅子利用の生活になっても外に出るかなあ」「車椅子利用者が困っていたら助けてあげられるかなあ」と言いながら質問に答えたり、「自分が高齢になっても『つどいの場』のような所がほしい」「『つどいの場』を続けていかなくては」という声が出る。また、あまり活動に参加していなかった男性のNW委員が『つどいの場』に出てくるようになり、『つどいの場』の活動に賛同する人が増えた。 ・機会があれば高齢者を支援したいと答えた人が81名（48.5%）いた。 【調査員が】 ・NW委員は「楽しそうだから参加したい」という健康な高齢者や「自分で歩けなくなり、車イスの生活になっても出ていける場所があるのがわかって安心した」という調査対象者の反応を受けて、「『つどいの場』は大事だなあ」と感じ、『つどいの場』を必要としている人が地域にいることに気づいた。 ・対象者名簿を見て自分の地域の寝たきり者を知る契機になったり、寝たきりの人やボランティアの意思のある人がどこにいるのかを知る契機になったりした。	・自分自身の生活の振り返りができ、『つどいの場』の効果や必要性に気づく契機になっていた。 ・調査票が『つどいの場』のPRとなり、『つどいの場』の認知度を上げている。 ・自分自身の振り返りができて、『つどいの場』の必要性を感じ、自分達のための活動でもあることに気づけていた。 ・潜在していた意欲ある住民の存在が、調査を通して顕在化してきた。 ・意欲のある住民は、どうすれば地域活動に参加できるかが分かった。 ・孤立しがちな寝たきり者が、地域のネットワークの中に入り込む契機になった。
・質問紙の配付と回収		

2. 結果報告会の開催を通しての結果

(1)「自分達の生活に関する理想を考える」グループワーク

方　法	結果（集い参加高齢者・NW委員・地域住民の状況・反応）	保健婦の気づき・意味づけ
①結果報告会開催の呼びかけ	・呼びかけに対して40名が参加に応じる（内訳：集い参加高齢者8名、ネットワーク委員19名、地域住民11名、行政職員2名）　（H10年10月23日実施） ・来所者の属性を配慮して、NW委員だけのグループ、NW委員と老人会の混在グループ、集い参加高齢者と老人会の混在グループの3グループを編成した。 ・1つの部屋で3つの車座になり、多様な意見が出された。	
②グループワーク	【各グループの意見から抜粋】 ・身体が不自由になっても住み慣れた家、地域で過ごしたい。 ・若者や近所の人と仲良く生活したい。 ・隣の人と何日も会わないことがある。 ・世代間の交流のある地域にしたい。 ・思いやり、助け合いの心がある地域にしたい。 ・将来、今のお年寄りのように暮らせたらいいと思う。 ・近所の方達が助けあえる地域であってほしい。 ・車椅子の生活になっても、みんなの力をかりながらみんなと共に外に出たい。 ・子供達と一緒に、気ままに暮らしたい ・20～30代の若い世代がNW委員会活動に関心を持って、参加してほしい。 ・もっと家賃が安い所に住みたい。 ・ヘルパー制度などの制度が充実して、使いたい時にすぐ使えるものになってほしい。 　自分の意見は自由に発言出来ており、「体が不自由となっても、お互い助け合いながら生活できる地域に住みたい」という自分達の目指したい姿や地域について語りあえていた。	理想像は、各立場や年齢によって多様であるが、世代間交流や若い人とのふれあいはどのグループも重視しており、成人住民に限らず、幅広い年代との交流の必要性を感じている。

(2)調査から明らかにされた地域の現状

調　査　結　果	参加者の反応	保健婦の気づき・意味付け
［結果説明会にて用いたスライドから一部抜粋］  図3　閉じこもり傾向の有無  図4　外出時の心配：体力  図5　外出時の心配：住民の眼	60歳台以下の男性において、50%が幸せと感じていないことや閉じこもる傾向が高いことを知って驚いていた。 外出時に体力に関して心配ない人は高齢になるほど少なくなることに納得する。 調査前は体が不自由な場合、外出時には住民の眼を気になると思っていたが、「心配」と答えた人は少なかったため、「意外だ」という声がでる。 この他に、車イス利用者の外出に対して好意的する住民の好意的な態度が示されたことに対して、「実際には車イス利用者を町中では見ていないのではないか」という意見が出される。	自分達が行った調査がこのようにまとめられ、結果が見えるということが理解できている。

(3)「理想と現実とのギャップを埋めるために、自分は何ができるか」のグループワーク

方　法	結果（集い参加高齢者・NW委員・地域住民の状況・反応）	保健婦の気づき・意味づけ
問いかけ内容 ①近所の人、友人、若い人と交流を持ちたいという理想に対して現実は男性に「友人がいなくて閉じこもる」という結果がでた。これに対してどうすればよいか？ ②車椅子利用の生活になっても外出したいという理想に対して現実は地域環境・体力・交通機関等で不安を感じて、出ていけない結果がでた。これに対してどうすればよいか？	・ネットワークの輪を広げる、集える場を作る。 例）男性の料理教室、夜間・休日の会合や教室 ・元気な時から人との交流を大切にしていく活動をする。 ・すでに地域の中にある『つどいの場』やNW委員会を積極的に利用していく。 ・『つどいの場』やNW委員会のPRを積極的に行っていく。 ・自分の趣味を活かして、人との交流を広げていく。 ・高齢者だからといって人に頼らず、自分でできることは自分で行う。 ・生活の張りや目的を持って生活をすることで、自然に閉じこもらないで済む。 ・『つどいの場』の活動を通して、地域の人々に自分達の生活の様子を知ってもらい、車椅子利用者が生活しづらい環境であることに、気づいてもらう。 ・車椅子利用者が来ても、対応に困らないような技術や自信を身につけておく。 例）車椅子の講習会や知識を得るための勉強会の実施	それぞれの立場で「自分が出来そう」という視点から、理想に近づく手段を考えている。

第二部　「これからの『つどいの場』の活動についた考える」-様々な地域組織における会合の開催を通して-

1.　『つどいの場』での集い参加高齢者とNW委員との話し合い

方法	結　　果（会合の中で決まった事）	保健婦の気づき・意味づけ
集い参加高齢者とNW委員との話し合い （実施日） H10年11月13日 H10年11月26日 H10年12月 2日 H10年12月16日	・集い参加高齢者（延）45名（1回　約13人参加） NW委員（延）24名（1回　約6人参加） 【集い参加高齢者から】 ・外に出る活動を活発にするし、新しい活動も考えよう。（買い物ツアー、喫茶店めぐり） ・『つどいの場』以外の所に出向いていこう。（老人給食、老人クラブ） ・自分の出来る事を実行しよう。 ・なるべく『つどいの場』に参加しょう。参加して楽しもう。もっ　と出ていこう。他の友人も誘いたい。 ・『つどいの場』を自分の夢を実現できる場にしよう。 【NW委員から】 ・自分も『つどいの場』を楽しもう。 ・自分がが老いるまで、この場の活動を続けていこう。 ・『つどいの場』の日程や時間を増やしたい。 ・要援助者に対して、どう接すればいいのかわからない。要援助者　にもっと接するために、介助方法を知る機会がほしい。 ・集い参加高齢者から活動費をとって活動基盤を　作っていきたい。	集い参加高齢者から、これからの『つどいの場』活動に対して、前向きかつ主体的に考えることができている。

2.　地域の会合（NW委員の地区役員会・PTA役員会・地域子供会役員会・老人会）

	NW委員の地区役員会 （NW役員　7名）	PTA役員会 （役員　12名）	地域子供会役員会 （役員　15名）	老人会 （会員　65名）
実施日	H10年10月21日 H10年10月29日	H10年11月25日 H10年12月　7日	H10年11月16日 H10年11月18日	H10年11月30日
会合の中で決まったこと	・PTAや子供会との活動を増やし若い世代と交流できるようにする。 ・行政や地域の会合を通して『つどいの場』の活動に協力が得られるように働きかけていく。 ・『つどいの場』を充実させていくために、他の地域への見学に行こう。	・子ども達に高齢者との交流機会を設けて、高齢者を思いやる心を養っていきたい。 ・そのためにも、役員として要援助者にもっとよく接するために介助方法を知る機会がほしい。 ・子ども達とNW委員にて車椅子の講習会を実施 月日：H10年12月20日 参加：子どもと親 80名 NW委員 25名	・キャンプ、餅つき大会で、高齢者との交流活動をしていきたい。 ・子供会と『つどいの場』との餅つき大会を実施。 月日：H11年1月10日 参加：子どもと親 150名 集い参加高齢者13名	・自分達の出来る範囲で『つどいの場』に協力していく。 ・老人会として、車椅子の利用者を受け入れることも考えていこう。
保健婦の気づき・意味づけ	NW役員として、様々な組織をつないでいく役割を自覚して担おうとしている。	子どもにとっても、その親にとっても、地域のさまざまな人と交流できる良い機会になっていた。	子どもにとっても、その親にとっても、地域のさまざまな人と交流できる良い機会になっていた。	・元気な高齢者として、何ができるかということに気持ちが馳せられている。 ・車椅子利用者や要介助の人にとって、地域での活動選択肢が増える可能性を高齢者自身がもたらせた。

3. 大阪大学でのNW委員、保健婦、行政、研究者との話し合い

方　法	結　　果（会合の中で決まったこと）	保健婦の気づき・意味づけ
大阪大学にて NW委員　1名 保健婦　1名 研究者　3名 行政職員　1名	(H10年11月17日実施) 【保健婦・NW委員から】 ・2～3年後に『つどいの場』の評価をするための調査をしていきたい。 ・学会等に『つどいの場』の活動報告をしていく。行政、地域の会合でPRしていく。 【研究者より】 ・大学側として知識的面で活動の支援をしていきたい。 【行政側より】 ・『つどいの場』を住民主体のB型機能訓練として位置づけ支援していく。	NW委員にとって、地域での活動を住民とは違う立場でサポートしてくれるネットワークができた。

V．考察・まとめ

今回我々は、集い参加者が『つどいの場』の必要性を再確認し、「してもらう、してあげる」の関係ではなく誰もが「自分のために」という意識をもって主体的に活動できるようになるための住民参加型行動研究を実施し、それによって集い参加高齢者や『つどいの場』の支援者が増え、その活動がさらなる地域づくり活動へ発展することや他地域へと広がることを目指して取り組んできた。

ここでは、今回の研究を通して保健婦にみえてきたことを、エップ報告書の3つの評価視点をもとにして述べる。

1. 住民参加による調査の実施と結果報告会を通して、集い参加高齢者と家族は、自分達の生活の振り返りができ、『つどいの場』に参加することの効果や必要性に気づく契機になっていた。NW委員は、調査に答えることで自分達の振り返りができ、『つどいの場』の必要性に気づいて「今後の自分のための活動」であることが認識できた。また、調査員の立場で地域の人と関わることによって、『つどいの場』を必要としている人が潜在していたことに気づいた。地域住民は、調査票に答えることにより『つどいの場』を知り、その中の意欲ある住民はどうすれば地域活動に参加できるかが分かり、新たに参加する寝たきり者やボランティアが増えた。
2. 今後の『つどいの場』の活動内容を決める会合を通して、集い参加高齢者とNW委員は、『つどいの場』での活動に対して、前向きで主体的に考えられることができるようになっていた。その結果、『つどいの場』以外の活動（老人給食）に参加する集い参加高齢者が出てくるようになり、NW委員は「してあげる」ではない活動計画が考えらるようになった。また、PTAや子供会、老人会では各々の活動において『つどいの場』との協働活動を計画し（そのうちの一部は実施済み）、様々な地域住民が交流できる兆しがみえ、車椅子や要介助の人にとって、地域活動できる機会が広がりつつある。
3. こうした活動の波及効果として、NW委員は、高齢者の送迎において保健婦に依存的であったのが、主体的に活動できるようになり、一部のNW委員は『つどいの場』の運営も行えるようになってきており、『つどいの場』の活動参加者の役割の再構築が始まっている。また、他の地域のNW委員が結果報告会に参加したり『つどいの場』に見学に来たりして、このような活動が他の地域にも広がりつつある。

以上のような変化や動きが見られるようになった背景として考えられることは、第一に、今回住民参加型行動研究を行ったため、住民自身が『つどいの場』や自分が生活している地域の問題や課題を身近なこととして捉えられるようになったことが挙げられる。またそのプロセスにおいて、『つどいの場』に参加できる条件図を作成しながら自分の生活との対比ができたので、「『つどいの場』に参加できる条件が、今どれだけ地域や地域住民などに整っているのか」を明らかにしてみたいという検証意欲を自然に導くことができたと考えられる。第二に、調査員として関わったNW委員が、調査対象者の住民の声や思いを直接知ることができ、そのことがNW委員自身の活動意識を高めたと考えられる。第三に、NW委員が高齢者を地域で支え

る役割をどうすれば担えるかという考えに基づいて行動するようになったことが、既存の地域組織同士のつながりをつくりあげていくことになったと考えられる。

さらにこうした変化を促した要因として、中泉尾地域の中に「自分達が安心して老いていけるための地域づくり」という長期的な視野で考えられるキーパーソンがいたことや、この地域では元気な時から地域での活動に参加している高齢者が多かったために、人と集うことの良さを多くの人に気づいてもらえる状況があったことが挙げられる。今回の研究を通して、NW委員の主体性が高められ、集い参加者と地域の人達との交流のきっかけができ、それによって地域活動全体がつながりを持ち始めており、個人的・心理的レベルでのエンパワメントと組織的レベルでのエンパワメントを達成する方向に動きだしたと言える[2)]。

今回の研究においての反省点としては、調査票の内容が多かったことやその分析に住民が殆ど関われていなかったことがあげられる。今後の課題と方針としては、研究報告書を住民に返すことと、地域全体が参加する組織（地域社会福祉協議会等）に働きかけていくことを考えている。またさらに、2～3年後にこのような活動を再度評価することも検討している。また一方では『つどいの場』を実施していくために、専門的アドバイザーや運営資金、施設の整備が十分でないという課題もあるので、こうした課題の解決にあたっても、住民の主体的活動を基に改善されるよう働きかけていきたい。

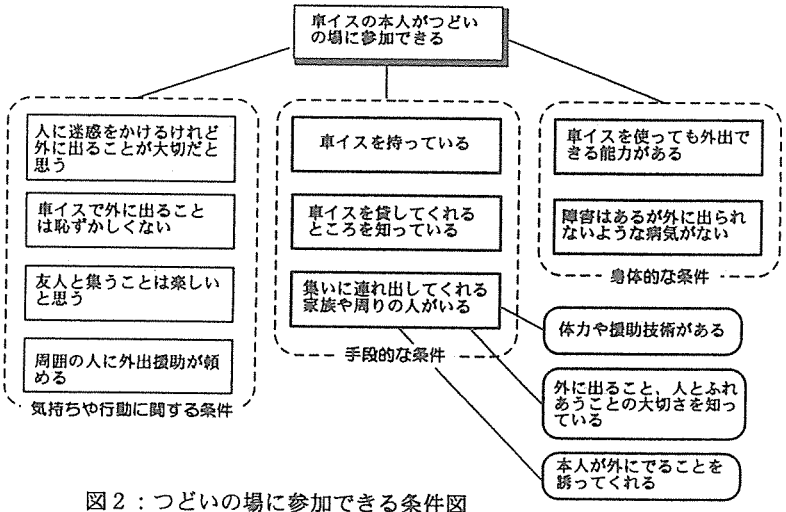


図２：つどいの場に参加できる条件図
―車イス本人の例（一部抜粋）―

【後註】

註1）いきいきエイジング・みおつくしプランとは21世紀に向けた大阪市の高齢社会対策の総合的な長期指針（平成3年度からの15ヶ年計画）であり、長寿化した人生を喜びあえる社会を実現するためのプランである。

註2）地域ネットワーク委員会は、地域のボランティア等で組織されており、健康な高齢者が健康を維持増進し、積極的に社会参加できるような地域ぐるみの取り組みを行い、他方では援護を必要とする高齢者やその家族についてはニーズの発見や相談に乗るなどして、日常の身近なことの助け合い活動等を支援し、高齢者の処遇の検討を行い、必要に応じて関係機関に連絡・調整を行う役割を持つ。

【参考文献】

1)大阪市民生局高齢化社会対策室．いきいきエイジングみおつくしプラン－21世紀に向けた高齢社会対策の長期指針－．真生印刷株式会社．平成2年10月

2)清水準一、他．アメリカ地域保健分野のエンパワーメント理論と実践に込められた意味と期待．日本健康教育学会．1997；4：11-18

3)カナダ/ブリティッシュ・コロンビア看護協会　著、北山秋雄　監訳　・看護戦略　－保健医療改革にむけての－．日本看護協会出版会．1995；109-117

4)岩永俊博．地域づくり型保健活動のすすめ．医学書院．1995